



しょうりんじ 正林寺

京都小松谷
京都市東山区渋谷通東大路東入三丁目上馬町
{御詠歌} 千歳ふる小松のもとをすみかにて
無量壽佛のむかへをぞまつ

{本尊} 法然上人
{開基} 惠空上人
{開創年} 正徳年中(1711~)
{寺宝} 大師堂。法然上人乾漆像

東山三十六峰とは、比叡山から南に稲荷山までをいう。この間、およそ三十六峰があり、稜線を走る観光道路の「東山ドライブウェイ」は、北の九条山から將軍塚を経て渋谷に至る。渋谷街道を下ったところに正林寺がある。縁起には、その昔小松谷は中尾御陵内で、伝教大師最澄の草庵があったという。平家一門が栄華を誇ったころに平重盛の屋形となり、小松殿と称した。承安四年(一一七四)重盛はここに灯笼堂を造営。四十八の灯明を点し、阿弥陀如来の莊嚴浄土を現し、極楽往生を願ったのである。平家没落の後、九条閑白兼実の山荘となり、月輪御殿造営の際に別に一字を建立し、法然上人を招いて常に法談を静聴された。建仁二年



(一一二一)正月、剃髪した旧跡である。また元久二年(一一二五)法然上人は虐病(熱病)を患い、諸々の治療にも癒えなかった。兼実公は心配の余り、聖覚法師に命じ、修法をもって平癒を祈られた。法然上人は、ここを終焉の地と思し召してか、歌を詠まれたという。千歳ふる小松のもとをすみかにて
無量壽佛のむかへをぞまつ
やがて健康をとりもどされた法然上人は久しく住まわれたが、御歳七十五歳にして遠島配流の身となり、讃岐へ御左遷の折は、当寺より出立されたと伝えられる。建永二年三月十六日(一一二七)、一行は鳥羽の南門より川船に乗った。この不幸を見送った九条兼実公は、僅か一ヶ月を経ずして大往生を遂げられた。その後、応仁の兵乱(一四六七)により、いったんは廃絶したが、正徳年中(一七一一)華頂山の義山上人およびその弟子惠空上人によって復興。時に兼実公の末裔九

条植基公より河原御殿の一部を給り堂宇とした。現今の大師堂、庫裏などがそうである。のち延享年間(一七四四、)より宝暦年間にかけて阿弥陀堂、山門、鐘楼堂等を完成。東山の名刹として洛東名藍の一となる。阿弥陀堂は法王殿と称し、丈六阿弥陀一尊の大像を安置。大師堂に奉安する法然上人像は、上人配所よりお帰りの勅免を蒙ったとき、結縁の記念に自作の像を信徒の者に遣しおかれたもので、当寺再興のとき靈夢に感じてここに迎えて本尊としたのは、不思議な因縁といふべきであろう。現在、渋谷街道に面して、雄大な山門が聳える。これより奥に大堂伽藍を構え、往古の繁栄を彷彿とさせる。

香林

法然上人のご生涯(その一)

上人を偲ぶ

京都の東山の麓に、華頂山知恩教院太谷寺という大きなお寺があります。一般には単に知恩院と呼ばれています。浄土宗を開いた、念仏の元祖法然上人のお墓があるこのお寺は、浄土宗総本山として栄えております。

毎年春四月、サクラの花の咲き乱れる円山公園のあたりを散策しますと、立ち並ぶ古い松の梢を縫う微風に乗って、大衆の唱和するお念仏の音が、蝉しぐれのように聴えてきま

こうりん
香林山 無量寺
機関紙 第13号
発行者 堤 俊海
香林編集委員会
久留米市本町 8-4
TEL0942-32-3010
FAX0942-32-2701

す。法然上人の亡くなった日を記念してその遺業を偲び、お徳を讃えてつとめる「御忌会」という大法要が営まれているからであります。

この法要には、お花見や觀光をかねて全国から京へ集まった大勢の善男善女が群れをなしてお詣りにくるため、広い境内は大変な賑わいを見せ、今さらながら上人のお徳の高さが偲ばれます。

お誕生

さて、法然上人は、今から



法然上人ご誕生の時、白幡天より降る

今誕生寺であります。法然上人の父は漆間時国という地方豪族で家柄も古く、その地の治安を担当する押領使という役人をつとめていました。母は秦氏といって、渡来人

系の一有力な家の出身でした。しかし、夫婦の間には永い間、子どもができませんでしたので、信仰心の篤い二人は、常々神仏にお参りして世嗣ぎの授かるように、と祈願していました。

するとある夜、母親は、剃刀を呑むという夢を見て懐妊し、四月七日、お釈迦さまの誕生日として知られる四月八日の前日、珠のような男の子に恵まれたのでした。

その日、どこからともなく一流れの白い幡が飛んできて漆間家の屋敷にある椋の木の梢にひっかかり、美しい楽の音を響かせながら七日を経て、また、どことなく飛び去る、というめでたい奇瑞があったと伝えられています。

両親の喜びはたとえようもなく、これはきつと仏さまの授かり子であるに違いない、と思つて「勢至丸」と名づけ、愛情こめて育てました。

阿弥陀仏のみ心と衆生

法然上人は、月かげのいたらぬさとほなけれどもながむる人の心にぞすむ」という和歌を遣されて、念仏の衆生を撰取して捨てたまわず」、『観無量寿経』第九仏身觀の文で「損益の文」ともいう」といふ、阿弥陀仏のみ心ころを月に托してよまれたものであ

る。月ひかりは山も河も、平野も海も、都会も寒村も、男も女も、貧しい人も富める人も、かしこい人もおろかな人も、ありとあらゆる相異を差別しないで、一律平等に照らしだしている。しかしいかなる名月も、これをながめようとしない人のころをどうすることもできないが、ただ戸外にたらずで月のひかりを仰ぐ人だけが、月のひかりにじかに触れ、月のひかりに包まれて、その風情を心に宿すことができる。

上人がこのような月のひかりに托して示そうとされた仏の光明は、日月のひかりのさしこめない心の奥深くまで入りこんで、心霊の間をうちやぶるはたらきをもっている。ともかくこの和歌は前半と後半とにわけて理解することが出来る。すなわち前半の句は阿弥陀仏の本願のみころを、後半の句は本願に救われる衆生の心行を内容としている。

先ず前半の句は、仏の光明は善人悪人などとわけへだてすることなく、いかなる人間をも一律平等にもれなく救済しようとする阿弥陀仏のみころをよくあらわしている。

阿弥陀仏が浄土をかまえられたということは、ご自身のためになされたのではない。苦悩を感じ不安におびえながら、やすらぎの世界のあることを知らずに人生を送っている人に浄土を思慕する心を喚起せしめようとして浄土を構えられたのである。

光る法然上人像

昭和九年の三月、春の御彼岸のちようど御中日の夕方、無量寺ん前ば通りござった、よそんおばさんの御み堂ん前で腰の抜けたごつなり、そけべターツとどべくり坐つてしまわしやったげな。手合せち声も出んげな、あんまりたまがってしもちやっとな。それもそうぢやる御み堂ん中ん法然上人の御尊像さんから後光のパーツとさしよるげなもん。寺ん前んあわやおこし屋ん大将が道にどん坐つとるおばさんば見つけち飛うで助に出て来らしやったら、おばさんな声ん出らんけ眼ばパチパチで指さすばつかり。そこで大将も御み堂みてびつくり迎天、ありがたかこつち手合すつと一諸に寺さん走り込うでお住職さんに知らせらつしやつたげな。お住職さんも本堂に入つてびつくりげな。そんうち表ば通りよつた人達の三十人ぐれなつて、皆御尊像さんに手合せてお参りし

たげな。お寺ぢやお中日でもあるげ、又あたで夜のお勤め、お説教んあつたげな。昭和の御代に仏さんから後光んさすてんなんてん考えられんこつばってん、ほんな事あつた珍しか話たい。

久留米ん昔話 松田康夫著より

お光を出された法然上人像は昭和二十年の久留米空襲で焼失してしまいました。

仏事のQ&A

Q わたしの病室へ、お坊さんが輪袈裟を掛けて見舞いにこられました。後で、病院での袈裟の使用をめぐって良否の討論となつてしまいました。どのようなものでしょうか。

A、袈裟とは、もともとお釈迦さまが定められた僧侶の制服です。通常は衣の上にかけるも

のですが、戦後は僧侶も地域社会との接触などのために、洋服を着て外出することが多くなつたため、袈裟を簡略化した輪袈裟をかけるようになりまし。質問のよつに、病院での袈裟使用には、賛否両論あると思ひます。近年ではとくに袈裟と「死」をオーパーラップさせて、忌み嫌う方が多いことから、今回のような討論になつたのかもしれません。一方、同じように布教と葬儀にかかわりながら、制服を着て病院へ出入りしても何もいられない教会の牧師さんとはどこが違うのでしょうか。僧侶が葬儀式にのみかかわっているのかのように取り上げられてこの現実を、素直に反省しなければならぬと思ひます。

病人には、死の断末魔の叫びや家族にもいえない苦悩が多くあると思ひます。『臨終行儀』という古い書物の中にも、人が死に直面した時には三種の「愛心」といふ執着心を起す、と書いてあります。家族、財産などへの愛着(境界)、ただ自分の体、身命のみへの愛着(自体)、最後は死後の世界はどうなるのかといふことへの執着(当生)の三つをいいます。こついついた悩みや苦しみに、仏教者として耳を傾け、患者さんが生命をまつとうするための援助、精神的ケアをしようといふものです。

この時の服装はおの自由ですが、患者さんの中には法服に袈裟の方が心が落ち着けていいといわれる方もあるそうです。このような時には希望に依じて輪袈裟をかけて、病室に出入りすることに思ひますが、一般の入院患者や家族の方々にいっそうのご理解をいただきたいと思ひます。



内容の一部

いのちを見失つた現代社会「まず今の社会のどこに問題があるのか考えてみますと、第一にいのちを見失つていふということがあげられます。生き物を、生きていふものと思わぬ人が多くなつてきました。小さな子供もそうです。最近自然に親しみ、野や山へ行つて虫取りをするといふことをあまりしなくなりなりました。そのかわりデパートへ行くとカプトムシを売っています。子供はお金を出して買ったものを飼っています。そのカプトムシが死んでしまつと、子供がなんと云つるか、「あつお母

さんカプトムシ動かなくなつた。電池が切れたらしいよ、カプトムシの電池どこに入っているの、電池替えたら動くでしょ」と云う。電池で動く自動車のおもちやの隣にカプトムシが売つていれば、カプトムシも電池で動く、電池を取り替へたらまた動き出すと思つても不思議ではありません。人工的に作つたおもちゃと自然のいのちとの区別がつかなくなつてきています。そのようにいのちを物と同じように考えるようになつてしまいましたから、猫を殺すとおもしろいか、いつのまにか人を殺してみたいという発想も現れます。何の悪意も感ずることなく、ためらいもなく人が殺せるような子供が育つてくる、これが現代社会です。」

東海学園大学教授 奈倉 道隆

同朋舎より出版されました。

お求めは有名書店またはお寺へ